

## 留学記(2)

小嶋祥三

わたしが留学した米国 NIH はアメリカの医学研究の総本山のような存在である。場所は首都 Washington, D.C.の隣 Maryland 州の Bethesda 市にある。広大な緑の敷地に Clinical Center (Bldg. 10) など多くの研究施設が点在していた。赤いレンガ?の建物が結構あった。大きな樹にリスが遊んでいたりする。当時、多くの日本人研究者が滞在しており、日本語で独り言も言えないような雰囲気だった。ラボのボスはユダヤ系が多かったのか、Jewish head に Japanese hands, などというのを聞いた。家からは自動車を通ったが、現在は地下鉄が通っている。家から 10 数分のドライブだった (大統領のいる White House まで家から 40 分くらいで行けたように記憶している)。

最初の半年滞在した Symmes と Newman のラボは、NICHD の Laboratory of Developmental Neurobiology (多分), Section on Brain, Behavior and Communication といい、リスザルなど南米産のサルの聴覚と音声の研究をしていた。Neuroethology の領域とっていいかもしれない。かれらの研究は München の Ploog のそれに近かった (Newman は Ploog の研究室に留学している)。かれらのラボは Bldg. 37 の地下にあった。居室と実験室が一緒になった防音室がある空間と隣りがサルの飼育室、それだけだった。わたしの眼からは孤立しているように見えた。むしろ、郊外の Poolesville にある NIH Animal Center がかれらの研究にはふさわしいように思った。Animal Center には Paul D. MacLean がいて、Ploog が講演をしにきたが、それを聴きに行ったことを覚えている。途中に麦畑?があり、随分と田舎だった。

David Symmes はわたしが帰国して 10 年後の 1990 年にがんで亡くなっている。Newman と Biben が Amer. J. Primatol. に追悼文を書いている。それによると、かれはわたしよりも 15 歳近く上だったので、当時 50 歳前後だったと思う。鼻眼鏡をして、大柄だったが、高めの声で話した。オートバイに乗って研究所に来ることもあった。若い頃は聴覚の神経生理学をやっていたようで、コンピュータや実験装置に詳しかった。サルの CFF (critical flicker frequency) の論文が 1962 年の Science 誌に掲載されていたのを覚えている。当時、わたしたちの研究領域で主要な雑誌だった J. Comp. Physiol. Psychol. を、かれは勢いよくゴミ箱に放り込んでいたのには驚いた。

わたしは John D. Newman と連絡をして、かれに受け入れを要請した。したがって、主に対応してくれたのは Newman だった。わたしたち家族が住まいを整えるのに、かれは助力を惜しまなかった。とても感謝している。Newman は Symmes に比べれば小柄でずんぐりしており、毛髪は薄く、眼鏡をかけ、ひげを生やしていた。低いつやのある声で話したので、聞きとりやすかった。かれの研究については、Science や Brain Res. に掲載されたサルの種特異的の音声に対する聴覚野のニューロン活動の論文を読んでいた。ただ、Symmes

も Newman も南米産のサルの声の行動研究に軸足を移していた。わたしのためだったの  
 だろうか、リスザルの聴覚野のニューロン活動の記録を行い、それを Atlanta で開催され  
 た北米神経科学会で発表した（この時、Florida 半島の間まで車でいった）。



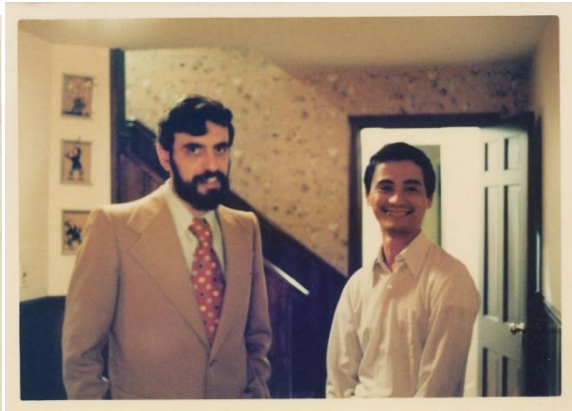
ネットで調べたら、John Newman の年相応？の写真があったので載せておく。少し前のもので今も同じ  
 か分らないが、Poolesville にいる Stephen Suomi がボ  
 スとなっている Laboratory of Comparative Ethology  
 の Developmental Neuroethology というセクションに  
 いるようだ。Publications は 5 年前までしか掲載され  
 ていなかったが、脳の神経生理学的研究はもう殆どや  
 っていないようだった。2007 年に亡くなった Paul D.  
 MacLean の研究の意義を 2009 年の J. Nerv. Mental  
 Disease 誌に書いていた。

わたしがこのラボで最も参考にしたのは聴覚実験の装置についてだった。帰国後は聴覚  
 と音声の研究をしようと思っていたので、必要な知識だった。かれらはコンピュータと発  
 信器の VCA, VCF 端子を利用して音の振幅や周波数を変え、音の提示を自動化していたが、  
 わたしも日本で同じ方式を採用した。このホームページにはわたしの研究成果も含めて、  
 「霊長類の聴覚と音声の研究」を紹介しているが、このラボでの経験は大変に有益だった。

Newman らのラボにいる間に、この後 1 年半滞在する Patricia S. Goldman (その後 Yale  
 の P. Rakic と結婚して、Goldman-Rakic になった) のところにも出入りしていた。皆、彼  
 女のことを Pat と呼んでいたもので、以下そうさせてもらう。Pat は NIMH (National  
 Institute of Mental Health) の Laboratory of Neuropsychology に所属していた。H.E.  
 Rosvold がボスで Pat のセクションと脳内視覚経路の背側、腹側系で有名な M. Mishkin の  
 セクションがあった。研究室、実験室は大きな Bldg. 10 の隣にある平屋の Bldg. 9 にあっ  
 た。Pat のラボは他に Roger Brown がいたが、N. Bugbee 他は多分非正規の若手の研究者  
 だった。Mishkin のラボには L. Ungerleider や日系アメリカ人の Richard Nakamura がい  
 た。B. Richmond も近い関係のようだったが、Mishkin らとの関係はよく分らなかった。  
 というか、短期的な訪問者なので、興味を持たなかった。E. Murray なども時折り顔を出  
 していた。両セクションの関係は何となくギスギスしていたように思った。しかし、わた  
 しは知らんぷりをして両方と適当に付き合っていた。

Pat 陣営の人たちを紹介する前に、Mishkin ラボの人たちについて述べる。Mishkin は  
 サルの脳の切除実験で K.H. Pribram と並んで超有名である。わたしが帰国した 2 年後だっ  
 たろうか、脳内視覚背側、腹側経路の枠組みを Ungerleider とともに提案した。この説は  
 視覚の脳内処理の理解に大きく貢献したと思う。Mishkin は中東系のような容貌だった。

詳しくは聞かなかったが、かれは日本にいたことがあるようだった。また、サントリーのウイスキーは最高だと言っていた。今でこそ、日本のウイスキーの評価は高いが、30年以上も前にそれを指摘していた。確かな舌の持ち主なのかもしれない。奥さんが裕福だという話を聞いた。パーティでお宅にお邪魔したことがあった。玉突きの台があり、生まれて初めて（多分）やった。その時の写真を載せておく。右の写真は **Richmond** とわたしである。**Ungerleider** はまだ若く、髪が短めの美しい女性だった。**Mishkin** とともにまだ現役で、



研究を続けている。**Richard (Nakamura)**は日系人だったので、何となく付き合いやすかった。我が家に来てもらったり、D.C.のお宅に伺ったこともある。奥さんはコーカソイドで日本に滞在したことがあるようだった。**Richard** は今は研究をしておらず、NIHの研究評価関係の仕事をしているようだ。NIHの2012年12月3日の広報?に、NIH names Dr. **Richard Nakamura** director of the Center for Scientific Review.とある。写真を載せてお



く。**Murray** は女性研究者だが、とてもサバサバして男性のような印象だった。マンガの **Peanuts** にでてくる **Peppermint Patty** を連想した。まさか、**Patty** のように勉強が苦手ということはないだろうが。**Murray** もまだ現役バリバリである。

さて、**Pat** の陣営だが、稿を改めたい。